

末黒野

すぐるの

7月号 (通巻875号)



山笑ふ

母よりも高く鞦韆をんなの子
桜葉降り艶めける石の肌
喜怒哀楽呑み込むポスト山笑ふ
乳房の句夜の桃の句三鬼の忌
霞立つ都会は墓場ビルの群
由比が浜春の日とろり波のたり
春眠や夢の欠片を拾ひ得ず
灯台や春日遅々を持て余し

松本
（名譽主宰）
三千夫

野遊び

駒返る草を踏み込み女の子
蜷の道紆余曲折をくり返し
湖の濃くさくらの淡き遠江
朧月朗読の子の声うるみ
野遊びや三男負けず嫌ひなる
三更へ歓談つづき朧月
絵タイルの欠くる歩道や花の昼
清明の波とどかさり虚貝
船の数増えゆく港花吹雪
神祀る百の石段花ふぶく
下萌や水門の音甍り
石けりに落花舞ひ上げ子等の径

黒滝志麻子

(主宰)

西行桜

野の光ひらりとほこび紋黄蝶
躑ける隠れ石塊草萌ゆる
池の端の傾りをなだれ雪柳
先見えぬ石段かかへ山笑ふ
やはらかき湖の日散らし土佐水木
大寺の伽藍に叶ふ桜かな
池の面のやはらかき影朝桜
日照雨去り西行桜揺れやまず
高瀬川の流れおだやか春の鴨
一掬の水の甘露や花疲れ
囀や森の茶房のログハウス
令和てふ御代のととのひ藤の花

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花疲れ

石黒興平

椎茸の菌打つ音や梅日和
開発の告知看板匂鳥
猛るほど更の風くる野焼かな
竜天に登り軍港波静か
潜水艦浮いて重たき春の潮
手びさしに望む猿島花の昼
大仏や芽吹きを山を光背に
小面のやや口開くる日永かな
心地よきもの一つや花疲れ
花吹雪艇庫のボートうつ伏せに

雪間草

岡野里子

海光に溶け入る春のかもめかな
湖よりの風の鼓動や雪間草
湿原の流れ幽けし葦の角
墓地近き我が家茶屋めく彼岸かな
隣家の売り出しの旗鳥雲に
春愁や紅茶に沈む角砂糖
日の当る池面黒ぐる蝌蚪の群
春北風や湾に五隻の潜水艦
迷彩服闊歩の街や花の冷え
惜春やジャズの漏れくる基地の街



花冷え

田中臥石

捨畑の隅に一叢黄水仙
小流れに親追ふ稚魚や水温む
すみれ咲く頃と約せど逝きし友
賓頭盧へ膝の願ひを花の冷
黄心樹の香にさそはるる古刹かな
夜桜や池畔をめぐる寄席帰り
花筏風に抗ふ舫ひ船
常の日は閉ざす鎮守社紅椿
夕照や日ごと色増す雑木山
飼猫の見やるその先浮かれ猫

草餅

森清信子

牛匂ふ牧の風吹く山桜
花散るや水送る龍の口
懐郷の想ひ去らざり夕雲雀
紫雲英田に座すや母子の数へ唄
封筒を投函す春惜しむ月
草餅や友二選せし末黒野誌
草餅や白陀の搗きし彩今も
菜種梅雨波郷渡りし南^ナ白^バ亀^キ橋
歩きつつ見やる白木蓮の空
望郷や代田の水に雲浮び

春時雨

安齋久英

音爆ぜて高まる野焼富士裾野
迫りたる闇ににじめり春の月
引潮に乾ぶる藻屑春日濃し
船出待つ輸出車あまた風光る
花冷や旧要塞の切通し
桜東風海藻絡む船着場
スカジャンを着こなす乙女春休
生氣漲る縄文土器や花の昼
峰に日を残して京の春時雨
花吹雪雲居に透る雅楽の音

改元

安齋久英

薄紙に透くる目鼻や雛納め
花の雲上総の果てに眼をこらし
春泥や隣り村との道しるべ
春陰や曾て庄屋の通し土間
春雷や遠海原に音尽きぬ
朝風呂や日の日差しの肩先へ
中空に貼絵の如き春の雲
揚雲雀地に届かざる声追ひぬ
春雷や改元の額掲ぐれば
春禽の即かず離れずビルの影

乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



滑り台

岡田史女

薔薇の芽や沖に艦船遊覧船
久々の声と出合へりつくしんぼ
つばくらめ学舎の道まつしぐら
すぐそこに工業団地春田打
古利根へ続く流れや花筏
遠足の声の散らばる滑り台
春宵やジャズの洩れくる路地の奥

花の冷え

大川暉美

花満開吸はるごとく人の波
岬鼻を洗ふ白波山桜
回廊を渡る足裏や花の冷え
土塊のごとく動かぬ蛙かな
土手染めて風の意のまま雪柳
一畑の風さらさらと麦青む
ペンの影落し文書く夜半の春

終着駅

小田嶋野笛

春禽の鳴き継ぐ百代千代八千代
登り着き即席麵やちやるめる草
終着駅にミモザ咲き満つ一人旅
画眉鳥の独壇場や谷隠れ
ひるがへる尾のきらめきやつばくらめ
蛙の子隠れ無き世へ罷り出で
春風や団子屋までを八百歩

花の客 加藤静江

風かたし肩すばめ行く花の客
ひとひらの落花の越えぬ勅使門
軍艦碑に並ぶ子規句碑花三分
貝寄風や空母全容鎮もりて
桜東風イージス艦の旭日旗
造り瀧の石荒あらと松の芯
剪定の済みし薔薇園海たひら

春 光 齊藤マキ子

車座のなかに土筆の二三本
春の潮ひねもす小舟あやしをり
闘病といふほどでなし蜆汁
待つことの好きになりけり種蒔きて
春光をポーンチャイナの白に盛り
スカジャンの竜の目玉や春疾風
読み終へてヒロインとゐる春の闇

山躑躅 堺 昌子

満開の桜の下や靴の音
異国人の銅像多し花の下
葎咲く四阿の辺の池の鯉
湧き水の底まで透くる花の風
一山の紅をつくして山躑躅
川釣りや鶯の声途切れ勝ち
水車小屋梨の花咲く道つづき

路上ライブ 高木邦雄

花の舞ふ路上ライブや街暮れて
池の辺の風とたはむる雪柳
懸崖の風に煽らる黄蝶かな
天守への急磴染むる桜葉
何時の間に捨畑埋む草若葉
白亜なる洋館の壁蔦若葉
落花舞ふマラソンゲート駆け抜けぬ

横 須 賀

今 村 千 年

薔薇の芽や帆檣詠める子規の句碑
鳥雲に明治は遠く三笠なほ
永き日のどぶ板通りカレー食ぶ
花明り刻ゆるやかに流れをり
揺蕩うて影寄り添ひぬ花明り
春昼や枕にしたる広辞苑
五歳児に論されてをり春日傘

春 昼

及 川 照 子

春昼の潮の香の汽笛かな
格子戸を漏るる機音春の昼
スカジャンの美しき刺繍やうらけし
春潮も聞くや伊玖磨のメロディーを
小綬鶏の呼び交ふ声や森の朝
廃屋の庇に対峙猫の恋
ばらの芽やいのち燦々日の燦々



青炎集

黒滝志麻子選



横浜 戸田澄子

スーパ―へ駅弁買ひに四月馬鹿

リハビリに歩の廻り青き踏む

住み古るも庭清明の犬氣満つ

三文の損と知れど春眠し

咲き満ちて空を隠せり八重桜

平成を惜しみつ五月待ちにけり

平塚 尾崎千代一

草原を子の駆けたるや蝶の空

鳳凰の放つ光や春の池

保育器に命の新た春の星

栈橋の夕日の波の日永かな

坊守の配る甘茶や大庇

駅前の花影伸びたる足湯かな

横浜 加瀬伸子

浮世絵の由比ヶ浜砂桜貝

日溜りに香箱座りうらうらと

春の田に膏雨待ちあぐ古老どち

久方の春満月の淡きかな

春満月観よと庭下駄ちぐはぐに

残花なほ吾が衣手に一二片

柏 渕田則子

渋渋と時計引き寄す朝寝かな

古紙被り真夜のあさりのささめきぬ

遠山や霞の帯をゆるく巻き

川風と遊ぶ花菜や暮れなづみ

碧眼の慣れぬ着こなし春シヨール

体重計を見間違へたる万愚節

横浜 野村重子

飛ぶさまに辛夷の花の百あまり
春風や軍港めぐる船の水尾
横須賀市歌みなどに流れ春の波
薔薇の芽の赤に秘めたる力かな
揺れ止まず子の乗り捨ての半仙戯
風浚ひ風を流して若柳

横浜 小沼糸み子

昼風呂にとつぶりつかり花粉症
カメラ手の春の怒濤や一人佇つ
強東風や釣舟波に浮き沈み
エンディングノート購ふ入彼岸
新元号の令和と決まるうららけし
童顔の牛久大仏風光る

横浜 新井八重子

堰越ゆる音の軽やか春の水
満月に触るるばかりや花辛夷
目も腸も食べ尽したり桜鯛
春の川手をひたす子の足までも
出つ尻の縄文土偶囀れり
羽音立て藤の開花を知らしめり

鎌倉 丸山千穂子

花冷えの野や半眼の磨崖仏
ひとひらの桜柄杓に神の水
春の雲川面に乗りてうつろへり
春愁や紺青の海静もりて
春愁の心均せる東慶寺
永き日や若き海人の背夕日浴び

東大和 谷口律子

ささくれの痛痒棕櫚の日曜日
桜まじ鎮まりてはたそぞろ神
桜月夜ゆつくりゆるり杖の音
花零る老木の肌温もりて
ひとひらの花点字読む指の先
音もなく居間のドアより初蚊かな

大 網白里

孜孜と歩を進める杖や風光る
薺咲く畦道つきて鎮守さま
菜の花の匂ふ夕べや川の音
雨音と連れ立ちて来る春の雷
中庭の花に集まる患者の眼
こはれゆく夫ど池塘の花の下

耕 土 集

森清 堯選



春愁や片付かぬものあちこちに

横浜 小池 桃代

園児らの列すぐ乱れ山笑ふ

余白なき介護日誌や花曇

降りますとバスの奥より新入生

もろ手出し受くる竹の子土かをる

ほつほつと庭の椿や厨まど

あかあかと下弦の月や花の上

春愁や吸取紙は文字を吸ひ

春愁や政子の匣の櫛毛抜

花冷えや開けば匂ふ薬箱

横浜 小原 紀子

花の夜や妬くも妬かれもせぬ齡

横浜 岩崎 藍

追へばなほおたまじやくしの尾の騒ぎ

そのことは解決済みよ目借時

捨てられぬ靴の軽さよ花今宵

バイオリン奏つる人も桜人

春蘭や小さき灯りの展示場

彼岸参話したきこと詰めこんで

花ごろも小町通りをたもとほり

海棠や乳たつぷりの児の眠り

さくらいろの蠟燭供へ春の宵

横浜 平野 秀子

子供等の芝生まみれや春休み

春風太き白樺横たはり

卒業や若き眼の生き生きと

踏青やセラピー犬と寄り添ひて

ふくろふを飾る風車や木の芽晴

横浜 中里 昌江

横浜 伊藤 鴉

学童の去りししじまの初音かな

花冷や爛を酌み合ふ玻璃の内

巣鴉の溢れて群るる大樹かな

串カツにジョッキのをみな春来る

先生の匂も今一つ花見酒

君影草

小川 玉泉

(名誉顧問)

初花の君影草をみ仏へ
谷沿ひの並木の桜真つ盛り
料亭の大看板をおほふ花
風捉へ谷底目指す花吹雪
幾世経し鎌倉山の夕ざくら
夜雨の跡微塵も見せず車輪梅

雑記帳 24

新しい元号が紙面を飾り、身の引き締まる思いである。新聞紙上を騒がすテロに、邦人が巻き込まれた。宇宙開発に凌ぎを削る技術力を平和維持に活用して行きたいものである。